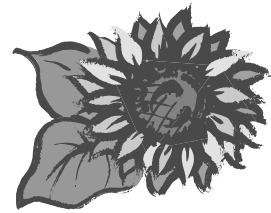


会 報

ひまわり

41号

ひまわりの会



— 発行人 —
 会長 一柳一男
 — 事務局 —
 前橋市堀之下町 16 番 1
 (財)群馬県健康づくり財団内
 電話 027 (269) 7811

41号の発刊によせて



会 長
一柳 一男

会員の皆様、こんにちは。皆様におかれましてはお元気で過ごしのこととご推察申し上げます。

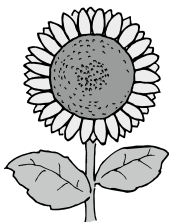
ひまわりの会も昨年、高崎支部が発足し東毛支部・前橋支部とともに三支部の発足をみることができ、これからの更なる活躍が期待されます。

会の行事の一つとして、去る一月中旬に群馬大学附属病院に世界最先端のがん治療といわれる重粒子線治療の設備の見学に行ってみました。新しく取り入れられる設備の模様を見ながら重粒子線治療の話聞くことができました。三月より治療が始まるとのことです。

また、会では従来の年間行事の他に毎月一

回の定例会(茶話会)を(財)群馬県健康づくり財団内で行っております。毎回多くの会員の方が出席され悩みを話し合ったり、医学に対する疑問を投げかけてみたり、先生のお話を聞いたり和気あいあいとした楽しい一時を過ごしております。出席されたことのない会員の皆様、是非一度お出かけになってみて下さい。

今年は、この群馬の水戸町でがん克服者の集い、全国よろこびの会の全国大会がひらかれます。(財)群馬県健康づくり財団のご協力の下、全国大会を成功裡に終わらせたいと思います。また、わたくしどもひまわりの会も設立三十周年を迎えます。このどちらの行事も会員皆様のご協力なくては成し遂げることができません。その節はどうか協力の程宜しくお願い申し上げます。お体を大切にされ、会の行事にもご参加ご協力下さいますようお願いいたします。





前橋支部では、昨年九月二十九日前橋市の
荻窪温泉「あいのやまの湯」で交流の集いを
開催しました。

ひまわりの会 前橋支
部「交流の集い」開催
藤井 稔栄



前橋市内から会員九名で、塚本脩治、能條
高一、藤井稔栄、吉田志津子、能條好江、木
村茂、青木玲子、藤崎千恵子、川浦幸子さん
が参加しました。

特に藤崎さん、川浦さん二人は会に新しく、
また、吉田さんは会合にはほとんど出なかつ
たが近いところで催しがあるので、今回参加
させてもらったとのことでした。

交流の集いでは、木村茂支部長のあいさつ
で始まり、次いで自己紹介でそれぞれがガンと
闘っている体験談や意見交換がなされました。

会食をしながら、特に塚本顧問（ひまわり
の会）からは、ひまわりの会結成当時から活
動してきたいろいろな話があり、又、参加さ
れた方々と話し合いをし、予定時間はあつと
いう間に経過しました。

参加したみなさんは、お互いに楽しい交流が
できてよかったと、次回を楽しみに散会しました。

茶話会（がん患者サロン）
根岸 利光

ひまわりの会は、30年以上の歴史を持つが
ん患者の会です。発足当時は克服者の会でし
たが、いまは闘病中の人が多くなりました。

治療は一段落したのに、心配事をかかえた会員
さんがいっぱいいます。秋の作品展などを契機に入
会した会員さんには、そうした方が多いようです。

役員は顔合わせの機会も多いのですが、新
しい会員さんのなかには、いきなり新年会や
旅行に誘われても、食べ物のことやトイレの
こと、体力的な心配もあり、うまく溶け込め
ないという声がありました。

せっかく迎えた会員さんに「どう馴染んで
もらおうか」こんな話をきっかけに、ひまわ



茶話会

りの会をサポートする(財)群馬県健康づくり財団から会場とスタッフ(医師、保健師など)の提供をうけ「患者同士が気軽に交流…」時には専門家に「アドバイス」もいただける、とても魅力的なつどいが始まりました。

「茶話会」と呼んでいます。ずばり、県内で最も早くに始まった「がん患者サロン」です。今年の3月で13回目を迎えます。試行錯

誤を重ねましたが最近では運営もスムーズになつてきました。

毎月1回、午後2時間ほど。特定のテーマは設けず交流しています。医師と保健師が毎回出席してくれ、とても心強いです。いつも10〜15名ほどの参加です。

手術後の食事の工夫や排泄のこと、抗がん剤の副作用の悩みなどを共有できるのが嬉しいですね。生まれも育ちも社会経験もまったく違うのに、がん患者の一点で同窓会みたいな雰囲気にはたっています。

ひまわりの会は群馬県中に会員がいます。車に乗れない方は集まるのが大変です。会員同士の助け合もしてありますが、「茶話会」の日には健康づくり財団が新前橋駅・前橋駅・前橋大島駅に送迎してくれます。

しっかりしたサポートがある私たちはとても恵まれています。私たちの経験も生かし、何時でも何処でもがん患者の願いに沿って、言葉を交わし情報を分かち合える「がん患者サロン」がひろがる事を願っています。

最近県内のがん診療連携拠点病院が病院内で、がんサロンを立ち上げ始めました。ひまわりの会の「定例会」参加者も都合がつけば近くのサロンにお邪魔し、交流を深めるようにしています。

加えて、各自治体や保健所などの協力が頂ければ、地域のがんサロンができると思います。がん患者にとって本当に力強い存在なんです。何かかならないものでしょうか。私たちも多少のお手伝いはできると思うのですが。

独り言

林 敏彦

◎独り言

過去何年か前までは「がん」と言う言葉を持つ我々に与える響きが、他の病「糖尿病」や「脳梗塞」「高血圧症」等とは違っていた様に思います。殺人者のイメージで、特殊な感情をもたらしましたが、最近「がんは治る」「怖がることはない」と言うように心象が変わってきて、我々患者にとっても「がん様」が身近になって来たのかなと仲間にしてやりたいのですが、依然彼の本当の正体は解っていないのが現状でしょうから、心を許す友にはなれません。共生したいと思うのです。がねー。





四万温泉・後列 左から3番目 林さん

◎転院することとなりました

診療に通院している原町日赤病院の泌尿器科は廃科になるとのことで、「二階に上がったら梯子^{はしこ}を取られた」気持ちで困り果てていました。が、本当に運良く、当会の根岸利光さんのお骨折りで群馬大学病院の泌尿器科にご紹介をいただき、去る平成 21 年 9 月 16 日初診の段取りとなりました。我々にとって、考えられる最良の

医療機関で最高の治療を受けられることほど幸せなことはないと思っております。

◎カルテについて調べてみました

日本語で診療録と言ひ、ドイツ語でカードという意味だそうです。「診療に関する経過を記録したもの」で医師法・医療法によって経過記録の義務、備えや保存の義務があり、各自治体の条例や規則でも規定があるそうです。ところで、このカルテ、記録後最低 5 年間は保存の義務があり、個人情報保護法も絡み、原則本人から開示請求があつた場合は開示が義務づけられているそうです。

カルテ以外の検査記録、画像写真、手術所見等の保存期間義務は 2 年間とのこと。(患者の家族・遺族には特殊な場合を除き、開示義務はないそうです)

そこで、問題だと思われるのが「5 年間の保存義務」です。我々の病の場合(その他の病気でも) 3 年、5 年、10 年等の生存率が論じられることが多い中、5 年間でカルテが破棄されることが実際にあるのであれば、患者にとってこれほど損失になることはないように思います。物理的に保管が難しいのであれ

ば、患者に引き渡してくればよさそうに思いますが。たとえ何が記録されているか素人に理解できなくても、セカンド・サードオペニオンが必要な場合、医師であれば重要な治療判断にはなると思うのですが。

厚生労働省は 2001 年、400 床以上の病院等に電子カルテシステムの普及を図るとの目標を立てたようですが、いまだに達成されていないのが実情だそうです。

将来は患者個人個人が自分の病気の情報の入ったカード一枚を持ち歩く時代がくるのでしょうか。

◎びわの効能

職場の昼休みに「びわ」の薬効について話が盛り上がりました。その中には「直腸がんがなくなった」とまで言う人がいました。アミグダリン(B17)と言う成分ががん細胞をやっつけるのだそうです。

私は自分で調べ信用できると思うサプリメントは使用することはありませんが「みのもんた薬」や代替療法はあまり信用しないのですが、そのような性格や対応は間違っているのでしょうか。どなたか教えて下さい。

四年目の検査

今井 忠夫

胸部食道がんの摘出手術を受けてから満四年目の内視鏡検査であった。去年はそれほど時間がかからず簡単に終わった検査であったが、今年はどうも様子が違う。「だいたい時間がかかっているけれど、何かおかしいところでもあるのだろうか」少々心配になってきた私の耳に「ルゴールを散布しますよ」といういやな言葉が入ってきた。不安な気持ちがいやな言葉が高まる。しかも悪いことに、接触不良だとかでモニターには何も映っていない。それが不安を一層掻き立てる。

ルゴールを散布されるとやはり苦しい。気持の上では身構えてみたのだが、どうしても「ゲーツ」とみつももない声が出てしまう。四年前、食道がんを宣告された時のことが頭に浮かぶ。あれこれ思い出したりしているうちに、それでも何とか検査が終わった。だらしなく流れ出ているよだれを拭きながら、「どこかおかしいところでもあったのですかねー」思わず看護師さんに聞いてしまった。「結果は後ほど主治医の方から説明があります」そういう返事があるのは承知していな

らも、聞かずにはいられない気持であった。それから診察日までの十日ばかりは何とも落ち着かない毎日であった。しばらくは忘れていた四年前の秋のことが度々思い出された。食事の度に食べ物が胸につかえるようになって、最初は胃の調子が悪くなったためだと思っていたのだが、どうも様子がおかしい。自宅近くの掛かり付けの診療所で診てもらった。その時はまだ自分ががんになることは



後列右 今井さん

夢にも思っていなかったのだから、今から思えば、ずいぶんとおめでたい話である。私の腫瘍はかなり大きくなっていった。診断は胸部食道がんのⅡ期か、あるいはⅢ期に入っているかもしれないというものだった。

何年たっても再発は怖い。手術の結果、声が出にくくなってしまったし、肺の機能はいまだに十分回復せず少し早足になると息が切れてしまうし、体重は37kgから一向に増える気配はないし、ちょっと油断すれば逆流するし、等々愚痴を言いだせばきりが無いが、それでもやっぱり生きている方がいい。

「転移があることは覚悟していた方がいい」手術前にそう言われて、自分でもそのつもりでいたのだが、結果は意外なことに、転移はゼロだった。どうして転移がなかったのか、主治医も説明に苦しんでいたようだった。

ようやく診察日になり、名前を呼ばれて内心ドキドキしながら主治医の前に座った私は、何か別のことを話したそうとするのをさえぎるようにして、「内視鏡検査の結果はどうでしたか」と自分の方から質問した。「特に異常はありませんでした」自分のからだ全体から緊張感がスーッと抜けていくのを感じられた。診察を終えて、どうしてルゴールを散布する必要があったのか聞くのを忘れてしまったことに気付いたが、そんなことはもうどうでもいいことだった。

群馬大学重粒子線治療棟見学

群馬県健康づくり財団 保健師 秋田 和子

平成 22 年 1 月 15 日 14:00 ~ 15:00

澄んだ北風のなか、ひまわりの会、会員 27 名の方が熱心に参加されました。健康づくり財団よりマイクロバス組と現地集合の方が治療棟前で合流し、群大病院の敷地北西に建つ真新しい施設の見学をしました。

見学にあたり、開放的な地下待合ロビーにて、担当看護師の方から、見学者の方に、「見学の目的は？」との声掛けから始まる、重粒子線治療の特徴と施設概要の説明がありました。会場からは、活発な質問があり、わかりやすい丁寧な答えに、会員の先進医療への期待と職員の事前研修の充実を感じました。現在施設では、見学者の対応が忙しく、既に、4000 名の方を受け入れているとのこと。ただいま、3 月からの本格稼働に向け工事やコンピュータの最終調整が行われていました。

群大の施設は、普及型として従来の 3 分の 1 に小型化した最新既施設で、国際的にも注



群大重粒子入り口

目を浴びています。従来の施設はサッカー場ほどの広さがあるといえます。治療室は、3 室ありました。メタンガスを原料とした炭素原子核（イオン）をシンクロトロンという円形加速器で高速で加速し、できた重粒子線を、①上から照射する部屋、②上と横から照射の部屋、③横から照射の部屋となっていました。重粒子線治療の特徴は、ピンポイント照



重粒子線見学

射が得意で、X線と異なり照射表面から奥に入っていくにしたがってパワーが減弱することが小さい。むしろ、体の深い所にあるがん細胞を殺す力が強くなる性質があるので、病巣に集中的に作用し、周辺の健康な組織への影響を極力抑えられる。

そのため長所として、体に負担が少ないので高齢者にも適用できます。短期間で治療できます。(平均 3 週間)

適したがんは、ひとつの部位に留まっているがん、悪性黒色腫や肉腫のように一般的な放射線（エックス線）が効きにくいがん、手術の難しいがんなどです。

重粒子線治療ができないがんもあります。

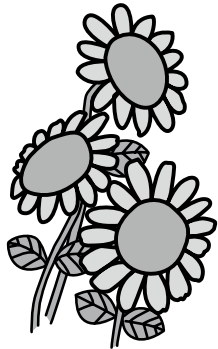
・白血病など、血液のがん。

・胃がん、大腸がんなど、蠕動運動を伴う臓器のがん。

・乳がんなどすでに他の良好な治療法が確立しているがん。

・全身に転移してしまったがんなど。

先進医療ということで、治療費は300万円程度で、全額自己負担となり、高額診療制度による助成も適用されません。一般診察、検査、入院、薬については、保険適用となります。早く、多くの実績をあげて、保険適用となり、誰もが受けられる日を期待します。



抗がん剤投与の頃に、聴いた「音楽」

篠原 敦子



私が千住真理子のヴァイオリンを生で聞いたのは、98年の冬の初めです。のどかな沃野に建てられた榛名町総合文化会館の音響の素晴らしさに、この音楽家はたいそう驚いていました。その日の演奏が忘れられず、以来、私は彼女のCDを聞き、エッセイも読むようになりました。

乳がんが発覚したのはそれから8年後のことです。化学治療（抗がん剤投与）の副作用が重くなるにつれ、疲労や倦怠感とともに、自分を取り巻く世界は暗いモノトーンに変わっていききました。部屋の隅に置いたスイートピーや黄水仙、シクラメンなどを、ベッドに横になったまま眺めていると、生きたいとい

う願いが視覚に集まり、カッと開いた目の中にまばゆい色彩が踊ります。

スイッチを入れるとラジオから流れてきたのは、マスネ作曲『タイスの瞑想曲』。それが誰の演奏かはすぐにわかりました。千住さんの奏でるヴァイオリンは、高温で溶けたガラスのように透きとおって撓み、唯一無二の神聖な、とでも言えばいいのか、「天の中核」に光の速さで届くような音色です。「世界で数人しかいない独奏家の音なのだ」と、ある人は言っていました。目を閉じて聴いていると、この上なく優しい色合いが体を包みこみます。千住さんは12歳より天才少女ともてはやされてきましたが、20歳を過ぎた頃に壁に当たり、一度ヴァイオリンを手放しています。彼女が再起するのは死を目前に控えたホスピスの患者に、バツハを弾くよう求められたのがきっかけでした。睨み付けるように聞いていたその末期がんの患者は翌日、息を引き取ったそうです。

「本物は、聴き手が育てる」と言われます。自分の生涯の締めくくりとしてバツハを聴きたいと願う人以上に、優れた聴き手がいるで

しょうか。二年余りヴァイオリンを持たずにいた彼女は、その時の自分の演奏が情けなく悔しくて、死に物狂いの練習を再開したそうです。

今、私達が聞くことができるのは、それからさらに二十年余り弾きこんできた芸術家の奏でる音なのです。治療の間をぬって、私はマスクをかけ言うように前橋文化会館へ赴きました。ビバルディの『四季』の『冬』は、まるで巨大な龍のしっぽが会場の中をうねっているような演奏でした。聴いている時はいいのです。魔法をかけられていますから。しかしストラディバリウスの音色は、闘病中の身にはあまりに凄いいものでした。

元氣をもらおうつもりで出かけたところが、私は帰宅してベッドにぶつ倒れ、翌朝九時まで意識がありませんでした。

それでも記憶に蓄積された感動は、折にふれてよみがえります。千住さんのプロ意識、苦しみぬいた鍛錬の歴史など、演奏家としての生き様そのものが、聴き手をとらえて離さないのでしょうか。忘れられない闘病の日の一コマです。

新 会 員 紹 介

千木良フサ子さん

金子 登美さん

柿澤 光雄さん

柿澤 弘子さん

大隈 昌子さん

お く や み

司子伊久代さん

謹んでお悔やみ申しあげます

一 緒 に

活 動 し て

み ま せ ん が

本会の活動にご賛同くださる方々のご入会をお待ちしています。

ひまわりの会事務局

(群馬県健康づくり財団内)

電話〇二七七

(二六九) 七八一一

